

## 〈修士論文要旨〉

## 古墳時代後・終末期の馬装の研究

長谷川 透\*

本研究は日本列島内の古墳時代後・終末期における古墳出土馬具の馬装復原研究である。馬装とは鍔や鞍、轡など個々に機能した馬具を馬に装着した状態である。近年まで古墳時代の馬具研究は馬具個別の型式学的研究が盛んに進められ、セット関係、組成については多く論じられることはなかった。従来、一古墳に1ないし2セットの馬装が確認でき、その特異な状況が論じられていたが、発掘技術の進歩と出土件数の増加によって、全国で類似した組成が把握できるようになり、馬装を考える土壌ができてきたのである。

古墳時代後・終末期の馬具は、中期の馬具が鉄製で実用性を重視していたのに比べ、後期になると鉄地金銅張り技法などで製作されることによって、金色に彩られた装飾性と実用性を兼ね備えた馬具に変化していく。これら後・終末期の馬具は外装を重視し、装飾性を増してゆくのである。外装を重視した馬具は権威や身分の表象としての機能を持つのと同時に、その装着状態を考慮した一体的な製作がなされると考えられる。このように古墳副葬馬具がどのように馬に装着されていたかを考えることは、製作から使用、副葬されるまでの幅広い議論を可能とさせる。

しかし、全国の後・終末期の出土馬具を対象にするには膨大であり、その抽出対象を制限する必要がある。その1つが破壊や盗掘を受けていない古墳である。これは後世の攪乱や改変によって馬具をはじめとする副葬品が、副葬当時の状況を残しているかを峻別するためである。そして、2つめが後・終末期に特有の装飾付大刀を馬具と共伴して副葬する古墳である。これは、馬具と装飾付大刀が、その生産段階において、製作技術や材質が非常に類似し、なおかつ、機能面においても近似するからである。それは装飾付大刀が、威信財として地方の支配権や軍事権の賜与、身分表象の機能を果たすと考えられており、これは馬具においても同様な機能を窺うことができるからである。装飾付大刀と馬具を個別に扱うのではなく、人馬一体の装具セットとして機能していたと考えるからである。また、馬具以外に共伴する武器・武具・鏡などの副葬品を比較、検討することによって政治的、軍事的背景を読み取ることが可能となろう。また、『古事記』、『日本書紀』など文献史学の成果を参考することによって古墳時代の政治変動にも言及できるものとなる。このような認識に基づいて、本研究は古墳出土馬具の組成から馬装を復元し、馬装と装飾付大刀を検討することによって、国家形成期における古墳時代後・終末期の政治的動態を考察することを目的としている。

装飾付大刀と馬具の出土する古墳は大型前方後円墳から小型群集墳まで確認できる。後期になると小型群集墳からの出土が顕著になるが、これは当期の群集墳築造の増加にみられるように、馬具の所有者層が拡大したものと見える。共伴して出土する副葬品については、武器や武具が共

平成16年度 \*文学研究科文化財史料学専攻

伴するが、一方で鏡や銅鏡などの祭祀性が見受けられる副葬事例もある。

振り環頭大刀は須恵器編年である大阪陶器編年MT15型式期頃からみられる。この振り環頭大刀はTK43型式期を境に共伴する副葬品に変化がみられる。これは伝統的な振り環頭大刀がTK43型式期に単龍・単鳳環頭大刀や双龍・双鳳環頭大刀などの装飾付大刀の流通によって、その伝統的地位が揺らいだためである。従来の副葬品組成によって形成されていた秩序を再構築するため、TK43期にあらたな副葬品組成がうみだされたものといえる。この副葬品組成は鏡、武器、武器からなるもので、その出土点数の多寡は振り環頭大刀副葬古墳が他の古墳より相対的上位を示している。この振り環頭大刀に共伴する馬具としてf字形鏡板付轡と剣菱形杏葉がある。この馬具組成は振り環頭大刀以外での共伴例が極めて少なく、振り環頭大刀とセットになって副葬されていたといえる。このセットは大型前方後円墳のみに限定されることから、最も上位に位置付けられる副葬品セットであろう。このf字形鏡板付轡と剣菱形杏葉の馬装は装飾付大刀の副葬が顕著になるTK43型式期以降見られなくなることから、急激な衰退を辿ったことがわかる。このf字形鏡板付轡と剣菱形杏葉という馬具組成は衰退直前のMT85型式期において、楕円形鏡板付轡や楕円形杏葉といった新式の舶載馬具と共伴して出土することもあり、衰退に向けての揺らぎが垣間見える。この馬装の崩壊が副葬品の変化と軌を一にしたものであったのは、装飾付大刀の出現によって、あらたな階層秩序が形成されたためと考えられよう。

馬装は、馬具装着方法として、大陸から舶載馬具が流入すると同時に流入すると考えられる。舶載の新式馬具は、その構造や形態、製作技術に関して国内に大きな影響をもたらした。しかし、馬装については、国内で広く展開することはなかった。新式の馬具を使用しつつも、馬装は従来の方式を使用していたのである。例えば、鴨稻荷山古墳にみられる楕円形十字文鏡板付轡と楕円形三葉文杏葉のセットがこれを示している。元来の馬装はf字形鏡板付轡と剣菱形杏葉、六脚雲珠で構成される馬装が典型例である。この馬装は尻繫に特徴があり、1点の六脚雲珠に3乃至5点の杏葉が取り付け馬装であった。しかし、鴨稻荷山古墳例は今まで見られなかった八脚雲珠と五脚雲珠を組み合わせたものに6点の楕円形杏葉を取り付けた馬装であった。この鴨稻荷山古墳例の馬具や馬装はいままで国内に例がなく、渡来系と考えられてきた。この鴨稻荷山古墳の馬具型式はこれ以後、国内で多く模倣され流通する馬具型式であるが、この馬装を模倣した類例は見られない。馬具は舶載された後、早い段階で模倣され、製作、流通するが、馬装については模倣せずに従来から国内で見られるf字形鏡板付轡と剣菱形杏葉を典型例とする馬装を用いるのである。杏葉を取り付ける雲珠が、六脚雲珠から八脚雲珠へ変化しても馬装は大きな変化をみせず、従来の馬装を使用し続けたのである。

以後、装飾付大刀の出現と合わせるように、馬装は八脚雲珠を中心とした尻繫構造に統一されるが、垂飾する杏葉などは相次ぐ渡来の波を受け、様々な型式や文様形態が創出され、多様化を極めていった。これらの杏葉が多く出土する古墳は大型前方後円墳や大型円墳などで多く見られるため、大首長層に比定される被葬者の馬装は豪華であっただろう。こうして馬装はより豪華さを極め、階層格差がより顕示されていった。こうしてみると、装飾付大刀の出現によって馬装も変化してゆく状況が捉えられる。このような6世紀後半代の装飾付大刀と馬装は、その変化が鋭敏に対応している。この背景には中央の政治的背景が大きく影響し、地方への政治的関与として

武器の分与がおこなわれたと推測され、これが全国規模で展開したとみられる現象といえよう。

6世紀末になると、馬装も金で彩られた馬具からかわって、鉄製鉸具付素環鏡板付轡などの素環轡に鉄製鐙という簡素な馬装へ転換していった状況が見受けられる。そして杏葉などの装飾具を取り付ける雲珠の出土も減ることから、馬装としての装飾性を必要としなくなったのであろう。このような馬装と共伴する装飾付大刀は頭椎大刀や圭頭大刀、円頭大刀がこれに相当する。近年、7世紀以降に盛行する方頭大刀が圭頭大刀を祖形にして型式変化しているとも論じられている。装飾付大刀が方頭大刀に集約され、共伴する馬具も鉄製の轡や鐙となり、より簡素化が進んでいる。これは律令体制の準備段階として、冠位制などによる新たな身分秩序の構築や薄葬化の流れの中で装飾付大刀や馬具、そして馬装はその機能を失っていったのであろう。